

エンリコ・マシアスの歌うアラブ=ユダヤ共生¹⁾

田所 光男

1960年代、エンリコ・マシアスは日本でもかなり知られ、越路吹雪や岸洋子
がその「恋ごころ」という歌を歌ったりしている。しかしそのマシアスの原曲
のタイトルは、*«L'amour, c'est pour rien»* (1964年)であり、直訳的に訳せば、
「愛、それは何ものにも代えられない」というものである。このタイトルの違
いにすでに表れているように、両者は、翻訳というよりはむしろ翻案と呼ぶべ
き関係にある。とくに「恋なんて むなしなものね / 恋なんて 何になるの」
(作詞：永田文夫、1965年)という、未練や韜晦が濃厚な箇所は、原詞の対応
部分では、「愛、それは何にも代えられない / お前はそれを売ることではできな
い / 愛、それは何にも代えられない / お前はそれを買うことはできない」と、
愛の価値を直裁に歌っている。また原詞に使われている「売る」とか「買う」
という言葉が、「恋ごころ」では消されていることも特徴的である。散文的な要
素はすっかり削ぎ落とされて、いかにも日本で言う「シャンソン」に仕上げら
れているのである。²⁾ フランスには「シャンソン」などという特別なジャンル
はない。マシアスのようなポピュラー歌手はふつう「ヴァリエテ」、つまりバラ
エティというジャンルに入れられる。それはともかくも、「恋ごころ」に見られ
るような変容はポピュラー音楽の世界では珍しいことではない。マシアス自身、
中村八大と永六輔の「遠くへ行きたい」という歌を、*«Ma dernière chance»* [私
の最後のチャンス] (1963年)というフランス語の歌として歌っている。注意
しなければならないことは、こうした翻案歌、あるいは替え歌を、元歌とは別
の歌と認識しておくことであろう。日本でヒットした「恋ごころ」とマシアス
の歌を、同じ一つの歌のフランス語版と日本語版とみなし、日本語で聴き歌い
ながら、そうしてフランス語原曲に関わる社会的、政治的な状況を思い浮かべ

る。そうした鑑賞は、やはり誤解につながる恐れがある。

この年 [1965 年] の歌の流行で、さらに強調しておかねばならないのは、やはり女性歌手たちの活躍である。越路吹雪は、アルジェリア解放闘争の中で生まれたといわれているエンリコ・マシアスの『恋ごころ』を岩谷時子の訳詞、夫の内藤法美の編曲で歌い、しぶいヒットとなった。これはオペラの世界からシャンソン歌手に転向した岸洋子も歌って、こちらも大ヒットとなった。フランスから独立しようとしたアルジェリアだったが、フランスが徹底的に弾圧して、解放闘争は苦難をきわめた。しかし、国を自分たちのものに取り戻そうという気持ちは、いくら弾圧されても、どこからか燃え上がってくる。こんな気持ちをエンリコ・マシアスが歌ったのである。硬い政治の言葉ではなく、「恋は不思議ね 消えたはずの灰の中からはなぜに燃える…」と歌ったのである。(山本)

マシアスの歌をアルジェリア独立戦争に結び付けて興味深い評である。実際、日本のシャンソン愛好家やフランス好きの中には、当時このように「恋ごころ」を聴いていた人々も少なくなかったのかもしれない。しかし、聴き手がこのように感動するのはいいとしても、そのように「マシアスが歌ったのである」と評することは趣味の次元にはない。本稿ではこの種の評の誤りを正して行こうと思うが、実はこういう誤りが起こってしまうのも、ただ単にポピュラー音楽における翻案過程のためばかりではない。それには、マシアスの立つ、歴史的に、政治的に微妙な位置が影響している。マシアスの位置を正確に測定するには、近現代はもちろん、北アフリカの全歴史を視野に入れる必要があるし、北アフリカとフランスという地中海の南北だけを考慮するだけでは十分ではなく、地中海の奥に位置するイスラエルという特定の一国への結びつきも問題にしなければならない。さらにまた、アルジェリア戦争は民族解放戦争で、植民者のフランス人から被植民者のアルジェリア人が独立を遂げた、というようなわかりやすい図式も相対化しなければならないのである。

1 複雑な「恋愛」関係

マシアスの最新アルバム『橙』(*Oranges amères*, Trema, 2003) に、「旅」(«Le voyage») という歌がある。

私たちはあれほど愛し合っていたのに

今別れているのは
私が彼女なしでいられるからではない
私はずっと忠実のままだ

彼女が傷つけられるとき、
私の全身は痛み
私の全霊はよじれる、彼女はそれほど美しい
私はずっと忠実のままだ

私はこの旅をあれほど夢見てきたのに
渡航は禁じられてしまった
私の荷物の中には
ただ思い出と心像しかなかったのに

彼女が私を待っていたことを、私はわかっている
私が知っているのは、一つの香り、
彼女の上に広がるあの空の色、
蜜の下の苦しみ

祝祭は隠されず、苦しみを忘れて
女たちの手は
子供のときのように炎の下で
食事の準備をしていた

私はこの旅をあれほど夢見てきたのに
狂った奴らが私の渡航を阻んでしまった
私は、ただ愛した人に
もう一度会うことしか夢見ていなかったのに

一般的に言って、ポピュラー音楽の歌詞の一つの特徴は、既制服のように多くの人がそこそこに袖を通すことができるところにある。とくに恋愛の歌はかなり広い年齢層が自分のものにできる。この「旅」でも、愛し合う二人が歌われていることは間違いない。しかし、これはいったいどのような二人なのであろうか。長く別れていたけれど、自分は彼女にずっと忠実であった、と「私」は言う。ここままであれば感情移入できる人は少なくないであろう。例えば、

近代化過程の中で農村を離れ、都会で根無し草になったような、そういう境遇の人々は、ふるさとを、あるいはそこに残してきた人を、恋い慕う気持ちをそこに投入できるかもしれない。しかし、その彼女は「傷つけられ」、しかも「私」がそこへ渡航するのを阻む「狂った奴ら」がいる。この設定はどうであろうか。遠くにいる人を恋い慕うような一般的な恋愛歌とはかなり違っている。実はこの歌は特定の事件に発したものであり、その事件に大きく依存しているのである。

2000年3月、マシアスはアルジェリア大統領アブデラジス・ブテフリカから公式招待を受けて、アルジェリアの6都市で公演することになっていた。一歌手の公演に大統領が関与する、これだけでも稀なことであろうが、それが公演の一週間前になって突然キャンセルされてしまった。

マシアスは1938年、アルジェリアのコンスタンチヌに生まれたユダヤ人である。しかし、アルジェリア戦争の末期1961年にアルジェリアを離れ、それ以来、ほぼ40年間、故国に戻ってはいない。³⁾それが、アルジェリア大統領からの公式の招待を受けて、マシアスはコンスタンチヌ出身のユダヤ人らとともに戻ることになり、誰もがこの「和解」の旅を心待ちにしていたのであった (Macias, *Mon Algérie* 16-17)。60年代に故国を追われた人たちにとって、ちょうどアレクサンドル・アルカディの映画『向こうの私の国』 (*Là-bas mon pays*, 1999) のピエール・ニヴェルのように、子供時代の跡を再び辿りなおせるものであったし、⁴⁾ また、1961年コンスタンチヌで暗殺されたマシアスの義父レーモン・レリス、この「ユダヤ=アラブ音楽のプリンス」 (*Mon Algérie* 10) への償いも期待されていた。⁵⁾ マシアスは60年代、ピエ・ノワールのシンボルとなった。⁶⁾ 「時にこの地位は私には重荷であったが、私はこれを受け入れ、それにふさわしくあろうと努めた」 (*Mon Algérie* 12)。こういうマシアスを招くことで、ピエ・ノワールとの和解を果たし、過去を清算して新しい方向に歩み出そうというのが、ブテフリカ大統領の意図していたことであったという (*Mon Algérie* 16)。

恐らくここで訝しく思う人もあろうが、アルジェリアを追われたユダヤ人は、フランス国民として植民勢力の一翼を担っていて、独立戦争によってアルジェリアを追放されて当然なのだ、とは考えていない。彼らには「恨み」があり (*Mon Algérie* 12)、しかし「復讐」したい気持ちを押さえつけようというのであった。

しかし、こうした和解の方向を快く思わない勢力もあり、コンスタンチヌでは 50 名近くのイマームがマシアスのコンサートをボイコットするよう呼びかけた。また、FLN の首領の一人アブデラジズ・ベルカデム前国民議会議長はこう述べたという。

エンリコ・マシアスはピエ・ノワールではなく、生粋のアルジェリア人である。この事実により、彼は自分の国を裏切ったアルキとみなされるのだ。(Mon Algérie 58)

このベルカデムがしばらくして外務大臣になる。ブテフリカの和解政策の方向にストップがかけられたのだと、マシアスは見ている (Mon Algérie 60)。

マシアスはこのアルジェリア公演キャンセル事件に非常に落胆した。この事件の後に刊行された『私のアルジェリア』(Mon Algérie) の冒頭ではこう述べている。「アルジェリアと私との間柄とは、まさしく恋愛物語である。子供時代の明るい始まりと、流浪という悲劇的な断絶を伴った恋愛。戦争によって碎かれた恋愛」(9)。「旅」に歌われた恋愛とは、何よりもこの自分とアルジェリアとの関係であり、「私」の渡航を妨害した「狂った奴ら」とは、上で述べた勢力のことなのであろう。このような特殊な状況に生まれた歌ゆえに、他の状況下にいる人には感情移入するのが難しいのである。

2 「スペイン系ユダヤ人」

アルベール・カミュの最初の小説『塩の柱』は、再版に際して、アルベール・カミュによる序が付された。

ここにいるのは、フランス人でもチュニジア人でもない、チュニジアのフランス語作家である。彼はある意味でユダヤ人であることも望んではない以上、彼がユダヤ人であるということも十分ではない。今読者に提示されている本書の変わった主題は、まさしく、フランス文化のチュニジア系ユダヤ人にとっては、何であれ正確にそうであることができない、というものである。(Camus)

ここで「フランス文化のチュニジア系ユダヤ人」について言われている、定義不可能性という事態は、文化や民族、国籍などの境界を越える現象が頻繁になり、さらには一般化したとも言える現代には、自己規定の不可能性、少なく

とも困難性として、多くの人に享有されることかもしれない。とりわけ、フランス植民体制下、アラブ人が多数派を占める被植民階層に、ユダヤ人として生まれたマシアスには、的を得た批評の言葉になる。

〈バラエティ〉の歌手として、マシアス自身は自分のアイデンティティに関わる場所をどのように表現するのか、それとも、こういう複雑なところは触らないで済みますのか。マシアスに、自己規定の歌、アイデンティティの歌はないのかと探してみると、その候補曲は少なくない。「sentimental」という語と脚韻を踏んで、自分を「oriental」と示す歌もある（「L'oriental」, 1962）。また「北の人たち」（「Les gens du Nord」, 1967）という、フランス本国の人々を歌ったものもあり、この場合には自分は〈南の人〉ということになる。しかし、ここで注目したいのは、「スペイン系ユダヤ人」（「Le juif espagnol」, 1980）という歌である。

私は泣いている子供である
 私は歌っている兵士である
 愛と心の国境で
 私は暴力が通るのを見た
 あらゆる色の涙がある
 役割など大切ではない

私はスペイン系ユダヤ人である
 私はアルメニア系ギリシア人である
 私はパリの外国人となるクレオール系フランス人である
 私はスペイン系ユダヤ人である
 私はアルメニア系ギリシア人である
 私は人間たちが誰かに話しかける必要があるあらゆるところにいる

[中略]

私は、アラブ系ユダヤ人である
 私はアメリカ黒人である
 私は放浪民やインド人の子供である
 私の運命など重要ではない

タイトルにもなりリフレインにもある「スペイン系ユダヤ人」。ふつうユダヤ人の下位集合としてよくレファレンスとされるのは、アシュケナジとセファルディである。イディッシュ文化とショアーを記憶の核に置く前者に対し、中世スペイン文化とその土地からの追放を集団的記憶としてもつセファルディ。「スペイン系ユダヤ人」はこのセファルディにぴたりと重なる。

ところでエンリコ・マシアスというのは芸名で、本名はガストン・グレナシア Gaston Ghrénassia といい、この姓はもともとスペインのもので、19世紀、先祖は迫害を逃れてアンダルシアから北アフリカに移り住んだユダヤ人である (Macias, *Non, je n'ai pas oublié* 25)。つまり、マシアス自身、まさしく「スペイン系ユダヤ人」であり、この歌にはマシアス自身のアイデンティティも表明されている、とまずは考えて間違いないであろう。

ところで、この歌にはもう一つ、ユダヤ人という言葉が登場している。「アラブ系ユダヤ人」である。市民権を得ている「スペイン系ユダヤ人」という言葉に対し、最後に一度だけ発せられるこの「アラブ系ユダヤ人」という言葉は、決して稀なものではないが、さほど使われることはない。この歌のフランス語の原歌詞では、この「アラブ系ユダヤ人」のところだけ、主語の «je» の前に強勢形人称代名詞 «moi» が置かれている。フランスのポピュラー音楽の世界では、歌詞のことは *paroles* と言われるが、伝統的な詩のように脚韻が踏まれるのが普通である。ここで «moi» という語が加えられているのは、母音の数を揃えるためでもあったろうが、この強調にこそ、マシアスの特別な思いが込められているのではないであろうか。

アルベール・メンミは、最近の著作『動かぬ放浪民』の中で、自分が「アラブ系ユダヤ人」という言葉を最初に提案した可能性を示唆しているが、それはともかくもメンミは『ユダヤ人とアラブ人』の中で、「アラブ系ユダヤ人」ということの内容をこう書いている。

私はアラブ諸国に生まれ、そこの人々とは友情、さらには愛情を保ち続け、しかもそれが堅固なものだと信じている。私はマグレブや中東の出身者やムスリムの黒人を学生の中にたくさんもっている。また、私は家族の一部とは今日でもなおアラブ語を話し、旅行のたびにそれを確かめている。つまり私が最も自然に自分に合っていると感じるのは、アラブ国におけるその光、匂い、果実、人間的接触の質なのである。(Memmi, *Juifs et Arabes* 145)

ただ単にそこに生まれたということだけではなく、習慣、音楽、料理、言語など、広い意味でアラブ文化に養われている場合にこそ、アラブ系ユダヤ人という意識も出てくるのである。こうした文化的な共通性はマシアスでも確かである。

私は、私たちの好みや文化の点で、多くのフランスのフランス人よりも、彼ら[アルジェリア人]のほうにいつそう親近感を抱いている。(Mon Algérie 50)

たとえ先祖はイベリア半島から来たとしても、アルジェリアのコンスタンチーヌで生まれ、アラブ語を母語とするエンリコ・マシアスは、メンミが上で書いている通りのアラブ系ユダヤ人と言える。「スペイン系ユダヤ人」という歌が発表されたのは1980年であるが、その時期の視聴者も、また2003年パリのオランピア劇場でのコンサートでマシアスがこの歌を歌うのを聞いた観客も、⁸⁾マシアスのこうした出自を知っている人は皆、この最後の一句こそ、マシアスの心奥からのアイデンティティ表明だと聴いたことであろう。そして実際、共産党の機関紙『ユマニテ』のインタビューでは、記者はマシアスに、「あなたのご自分のことをアラブ系ユダヤ人と定義されるのですね」と問いかけているのである(Macias, «Le rêve oriental d'Enrico»)。

3 アラブ＝ユダヤの幸福な共生

さて、一般に××系○○人という複合的な規定の場合、××と○○とが順接しているのはまれで、両者は反発し合っているのが普通であり、そこに過去の歴史の全量がかかっている場合も少なくない。この「アラブ系ユダヤ人」というアイデンティティの言葉もそうである。近現代に限っても、19世紀末の世界シオニスト会議の決定以降、アラブ人とユダヤ人は中東において衝突を繰り返してきた。その頂点が1948年におけるイスラエル国家の建国である。アラブ系ユダヤ人という言葉は、この対立する二項によって構成されているわけで、心穏やかに表明できるアイデンティティの言葉ではない。

しかしマシアスは、アラブとユダヤこの二項の親和性を強調する。マシアスは、アルジェリア・コンスタンチーヌの、自分の生まれた家をこう振り返っている。

それは4階建ての小さな建物で、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒の家族が同じ屋根を分かち合っていた。それは幸福の家であり、扉が開かれ、相互理解と友情の家であった。これこそが本当の共同体、書物や大思想の共同体ではなく、毎日毎日の、瞬間瞬間の共同体、苦しみと喜びを分かち合い、他者によってのみ自分が存在し、それぞれの愛なしには何ものも建設されることのない共同体に違いない。(Non, je n'ai pas oublié 9)

美しい〈愛の共同体〉という趣きである。マシアスが音楽の世界で実現しようとしているのも、こうした共同性にほかならない。しばらく前からマシアスは、アラブ系のミュージシャンらと共同でコンサートを行ったり、アルバムを出したりしているが、その基盤となっているのは、マルーフである。「マルーフは、アンダルシアの9世紀から15世紀にかけての幸福な黄金時代に、ユダヤ人とアラブ人の、音楽の大家たちによって作られた」(Mon Algérie 24)。この時期がマシアスの心の中では「永遠に失われてしまったパラダイスのように残っている」(25)。中世スペインにおけるアラブ＝ユダヤの「完全な和合」は、レコンキスタによりイベリア半島を追われた後、ユダヤ人とムスリムにより、逃れた先の地中海諸国で、とりわけ北アフリカで維持されてゆく(25-26)。1961年に暗殺されたレーモン・レリスはこの音楽のシンボルであった。マシアスは父親の先祖もこの流れの中に置いている。マシアスの父自身レリスの楽団のバイオリン奏者であった。⁹⁾ 1961年、アルジェリアを離れてフランスに来て、この親子がまず試みたのも、この音楽伝統を持続させることであった。しかしうまくは行かず、マシアスはこの音楽をレリスの今日帷子でくるんで(27)、〈バラエティ〉に転向して行く。マシアスは、1999年以降、タウフィク・バスタンジー¹⁰⁾と協演することで、このマルーフに回帰し始めたのである。

すでに見た「旅」と同じくアルバム『橙』の中に収められている「私のアンダルシア」(Mes Andalousies)にはこうしたマシアスの思いがよく表明されている。

私は夢を見る、それは最も古い夢
それは昨日のことだったし、明日のことだろう
三つの希望が
うわべを笑う

言葉の混合

音楽の混合、そして肌の混合

大地にしがみつき

そこにあることを誇りに思い、何百年も生きている

あのオリーブの木々

いつかもしそのオリーブに語らせることができるなら

どのように平和を獲得することができるのかきつと話してくれるだろう

今日私が恋しく思う国があるなら

それは書物が語っているあの国であり

心地よく生きていたあの時代である

*私のアンダルシアはどうなってしまったのか

私たちのアンダルシアはどうなってしまったのか*

[中略]

私は夢を見る、それは最も古い夢

それは昨日のことだったし、明日のことだろう。

幸運にも結ばれた三つの希望が

微笑を分かち合う、

喜び、悲しみ、そして楽しみ

三つの虹が

太陽の下に現れる

赤く焼けた土地に

遮られた地平線から

今日私が恋しく思う国があるなら、

それは、私がフランメンコの音に合わせて思い出す

あの時、あのエルドラドーだ

「アンダルシア」とは、何よりも中世南スペインのアンダルシアであり、そこに融合する「三つの希望」とは、もちろん、アラブ文化とキリスト教文化、

それにユダヤ文化であろう。しかし、「私のアンダルシア」は複数形で言われ、しかも「私は夢を見る、それは最も古い夢 / それは昨日のことだったし、明日のことだろう」と繰り返されている以上、それはこの三者がともに働いてスペインの黄金期を作り上げたあの固有の土地には限られない。中世ばかりではなく他の時にも現れたし、イベリア半島ばかりではなく他所にも現れた。そして、その「エルドラド」はいつかどこかでまた現われるであろう。すでに見たマシアスの生家もまた、その一つなのである。「私のアンダルシアはどうなってしまったのか / 私たちのアンダルシアはどうなってしまったのか」というリフレインには、アラブ＝ユダヤの共生というこの失われた「エルドラド」への強い憧憬が託されていることは明らかであろう。

4 アラブ＝ユダヤ共生言説の広がりとその問題性

しかしマシアスのこのような思いは、彼の独創ではない。それどころか、複数の中心をもった連合軍のごときアラブ＝ユダヤ共生の言説の中に組み込まれている。アルベール・メンミは『ユダヤ人とアラブ人』の中で、世界に広まるアラブ＝ユダヤ共生言説を批判的に考察して、以下のようないくつかの中心を取り出している。1) チュニジア大統領ブルギバやリビアの国家元首カダフィ大佐などに典型的に見られるアラブのプロパガンダ、2) ヨーロッパ左派の硬直した論理、3) 現代の歴史家の誤った信念、4) イスラエル人のはかない希望、5) マグレブ出身ユダヤ人のノスタルジー (*Juifs et Arabes* 56-57)。このように多様な中心核をもつアラブ＝ユダヤ共生言説の基本内容は、ユダヤ人はキリスト教社会で迫害を受けてきたがイスラム世界ではずっと幸福であった、という主張である。そしてその系として、キリスト教社会における反ユダヤ主義の犠牲者がアラブの土地にやってきてイスラエル国家を建て、伝統的なアラブ＝ユダヤ共生を破壊してしまった、と主張されるのである。¹¹⁾

さて、この言説にきわめて重要な根拠を提供しているのがジンミー制度についての評価である。この制度はイスラム世界において一神教徒が「啓典の民」として受けた特別待遇であるが、例えば、イスラム学者井筒俊彦はこう説明している。

この「啓典の民」という概念の特徴は、イスラーム教徒ではなくとも、「啓典の民」として認められさえすれば立派にイスラーム共同体の内的構成員、構成要

素でありうるということです。[中略] 無論、その位置はイスラーム教徒よりも低くて、「被保護民」(dhimmī) という従属的なものです。そのしるしとして特別の税金も課されます。ついでながら、その税金が経済的にはイスラーム教徒の主な財源となったのでありますが、とにかく重い税を払わされる。これが、「被保護者」たちにとってはかなり屈辱的だったらしいのですが、しかし、その代わり、生命財産は完全に保護され、平和が保障されます。あまり目立ったことをしない限り [中略]、それぞれ自分の宗教を守り、自分独特の典礼形式で神を祀ることを許される。[中略] 要するにイスラーム共同体というものは、単にイスラーム教徒だけでできている共同体ではなくて、イスラーム教徒がいちばん上に立ち、その下に複数のイスラーム以外の宗教共同体を含みながら、一つの統一体として機能する大きな「啓典の民」の多層的構造体なのであります。(『イスラーム文化』127-128)

ここで確かに井筒はジンミー身分に置かれた人々の「屈辱」感にも一応の配慮を示していて、記述の中立性が尊重されているように見える。しかし、井筒の説明する言葉それ自体に従っても、その「多層構造」とは、「いちばん上に立つ」イスラーム教徒とそれに「従属」するジンミーから成る、上下の差別構造である。言い換えれば、その「共同体」とは古代ポリスにおける市民と奴隷の二分界のように、特権者が全体として従属集団の上に載っている。それにもかかわらず、劣等な位置におかれているマイノリティ集団を、「立派にイスラーム共同体の構成員」だとするのは、多数派イデオロギーをあまりに無批判的に受け入れてはいないであろうか。メンミは挙げてはいないが、イスラーム学者の中にも、このようにアラブ＝ユダヤ共生言説の支持者を見出せるのである。

2005 年秋、フランス各地に暴動が生じた時期しばしば言われたのは、アラブ系移民の若者たちが、「二級市民」の差別的状態に不満を爆発させている、ということであったが、イスラーム世界におけるジンミー身分としてのユダヤ人の地位は、セシル・エニオンの言うように「二級臣民」であった。ただ、エニオンにとって、こういう認識は譲歩にすぎず、「しかし彼は [ジンミー] はヨーロッパの地の非キリスト教徒に比べてはるかに羨むべき地位を享受していた」と肯定的言明へと進んでゆく (Hennion 41)。アラブ＝ユダヤの共生を歌うマシアスは、こうした問題点をどのように考えるのであろうか。

すでに引用した「私のアンダルシア」からも窺われるように、マシアスは、アラブ人とユダヤ人がいつでもどこでもうまくやってきたとは思ってはいない。

それは次のように、イスラム教について述べた記述（もちろんアラブ人についての評とは同一視することは正しくないが）の中に明確に表明されている。

一方でこの宗教は、寛容の象徴であり、ユダヤ人がしばしば最良の待遇を受けたのはムスリム諸国であったのは確かである。しかし他面、しばしばユダヤ人憎悪が爆発し、野蛮さが勝ることもあった、そういう恣意的な時代が常に存在してきた。(Mon Algérie 116)

ここで言及されている「最良の待遇」とはジンミー制度の実現したものと解釈できよう。そして、エニオンの展開とは逆に、マシアスはこうした認識を踏まえて、ユダヤ人の状況の否定的な側面を明らかにしているのである。しかも、それはジンミー制度とは別なところに発する差別ではなく、その制度それ自体に根ざしていることを示している。

私が知っている一切のことは、祖父の話から得たものである。祖父によると、フランス人の到来以前、オスマン帝国の治世下、ユダヤ人はコンスタンチヌのベイ〔総督〕に屈従させられていた。すべてのアルジェリア人がトルコ人からひどい扱いを受けていたが、ユダヤ人は特別な境遇を蒙っていた。例えば、ユダヤ人はコンスタンチヌのほかの住民とすれ違うとき、相手がトルコ人であろうとなかとうと、歩道から降りなければならなかった。またこういう話もある。金曜日の午後、ベイの密使は町の蒸し風呂に出現して、主人のハーレムのために一番美しい若いユダヤ人女性をさらったのであった。(Mon Algérie 116)

マシアスがここでユダヤ人の蒙った「特別な境遇」として挙げている事例は、ジンミー制度を批判的に論じる他の人々の著作が列挙する差別的事態と同種のもを示している。¹²⁾ ただマシアスで特徴的なことは、ムスリム全体の中で、とくにトルコ人の非を強調しようとしていることである。オスマン帝国のくびきからのがれるためにユダヤ人はフランス側に就き、アルジェリア人とユダヤ人の間に最初の溝ができたのは恐らくその時であろうと言う。フランスはこの溝を利用して分断統治しようとしたのであり、1870年のクレミュー令によるユダヤ人のみへの国籍付与もこのような「毒入りの贈り物」であったが、すでにユダヤ人はフランス志向で生きていた以上、それを拒否することなどできな

ったという。そして、このようにフランスによって差別的状態に置かれたアラブ人の不満が、独立戦争の一因であるとマシアスは述べている (*Mon Algérie* 117)。

ところで、マシアスはアラブ世界における迫害に具体的に言及している。1934年8月のコンスタンチヌにおけるユダヤ人虐殺事件は、アルジェリアのユダヤ人の集合的記憶の中に確実に位置を占めているが、¹³⁾ マシアス一家にとってもそれは「悲劇」の記憶として残っている。この事件が起こったのは、マシアスの生まれる前のことである。アラブ地区に住んでいた、マシアスの母の妹はこの事件で子供とともに虐殺された。マシアスの母は深い精神的な障害を負ってしまったと後にマシアスは書いている (*Non, je n'ai pas oublié* 31-33)。¹⁴⁾

アラブ＝ユダヤ共生言説は、とりわけショアーの犠牲が巨大なものであったところから、ユダヤ人迫害をキリスト教社会に固有のものとすることでアラブ社会でのユダヤ人犠牲を過小評価してしまうわけであるが、北アフリカで現実生きていたユダヤ人としてマシアスは、そういう言説の覆い隠してしまいがちなものをやはり見ないわけには行かないのである。

こうして、前述のように、『ユマニテ』の記者に「あなたはご自分のことをアラブ系ユダヤ人と定義されるのですね」と水を向けられた際、マシアスはそれに乗らず、次のように答えたのである。

ユダヤ、それは私の宗教で、アラブ、それは私の文明です。私は自分のことを「ベルベル系ユダヤ人、アンダルシア系ユダヤ人」と規定します。スペイン系ユダヤ人という歌の中で、「自分はアラブ系ユダヤ人である」と歌うところがありますが、私はアラブ系であるという事実をやや誤って主張していました。「ベルベル系ユダヤ人」であると言うべきであったでしょう。アルジェリアはアラブの国ではなく、まさにベルベルの国なのですから。(Macias, «Le rêve oriental d'Enrico»)

チュニジア出身のメンミは、かつてカダフィ大佐とのシンポジウムで、自らを「ユダヤ系ベルベル人」と自己紹介した (*Le Monde*)。上でマシアスは「ベルベル系ユダヤ人」と自己定義している。主従が入れ替わっているが、ともにアラブという文字が消されている。北アフリカのユダヤ人のこうしたアイデンティティの言葉をよく理解するには、北アフリカにおける征服と支配の、長く複雑な歴史全体を視野の中に入れる必要がある。北アフリカを語る時、往々にしてしまうことは、1830年、フランスはアラブ国家アルジェリアを侵略した、

という誤った歴史認識を出発点にとることである。しかし、フランスが北アフリカに侵攻した時、そこに存在したのはムスリムだけの桃源郷ではなく、古代からそこにはいくつもの外来勢力が到来して攻防を繰り返し、民族的にも複雑な土壌が形成されてきた。19世紀はじめフランスが侵攻した時、支配権力はトルコ人の手にあった。アラブ人はベルベル人やユダヤ人とともに被支配者の側にあり、新たな外来勢力フランスに対し、この多様な住民は多様な態度をとったのである。¹⁵⁾ アラブ人にとってそれは抑圧となり、破壊に至ったが、メンミの言うところによれば、それは多くのユダヤ人にとって、「一種の解放」であった (*Juifs et Arabes* 70)。そこで長くマジョリティを占めていた被植民者アラブ人は、いわゆる先住民ではなく、彼らもまた外来の征服者として、ユダヤ人を差別し続けてきたことを北アフリカのユダヤ人は忘れてはいないのである。

結び

ミシェル・アビトボルも言うように、アラブとユダヤの幸福な共生を歴史的に否認する見解を取る人でさえ、中世イベリア半島の幸福は認めざるをえない (Abitbol II-III)。マシアスの「私のアンダルシア」もまた、その時空をモデルとしていた。マシアスはアラブ＝ユダヤの共生を歌う。しかし、そう歌いつつも、「アラブ系ユダヤ人」という規定を退ける。すでに述べたジンミー制度に基づくイスラムの「共同体」とは結局のところ、アラブ社会の中に、ユダヤ社会が下位要素として組み込まれ、全体の発展を支える形態である。こうした共生形態の賞賛は、一般向けの事典の中にも見られる。例えば、『世界大百科事典』の「ユダヤ人」の項目には、「全体としては、イスラム世界のユダヤ教徒はその信仰を守りつつ、経済・文化の重要な担い手あるいは伝播者として活躍し、イスラム社会の発展に寄与することができた」と総括されている。ユダヤ社会を評するのに、「イスラム社会の発展に寄与することができた」というところに判断基準を置くのは、妥当なことなのであろうか。マイノリティはマジョリティから貢献度をテストされて、良きマイノリティか悪しきマイノリティかを決定されるというわけなのであろうか。こういう共生形態はマシアスの目指すものではない。マシアスは次のように、アラブ人とユダヤ人が「対等」な資格で建設する文化の複合性を理想とする。

我々 [ユダヤ人] は、この [アラブ] 文明に、[アラブ人と] 完全に対等な形

で所属している！我々はこの文明を造り、この文明が我々を作った。文化にその交流や共有の次元を認めようとはしない人々は、... 犯罪者のように振舞う！（*Mon Algérie* 74）

アラブ人、ユダヤ人、それにキリスト教徒がともに一つのステージに上がり一つの音楽を奏でるマシアスのコンサートは、こうした理想を目指しているものと言えよう。その音楽はユダヤ人だけのものでも、アラブ人だけのものでも、キリスト教徒だけのものでもない。そしてそうであるからこそ、マシアスのコンサートを妨害しようとしたフランス在住のイマームは、「ユダヤ人はアラブ語で歌う権利はない」（*Mon Algérie* 72）と、文化的な障壁を堅牢に築いて、マシアスの主張する文化の複合性、共有性に攻撃をしかけたわけである。

ところでこういう方向はもちろん、アラブとユダヤの共生領域だけで主張されるわけではない。〈バラエティ〉の歌手としてのマシアスの音楽活動を、早い時期から作詞者としてずっと支えてきたジャック・ドマルニーについて語りながら、マシアスは、二人の間に「一緒に祈れる寺院」が築かれるのだとを述べている（*Non, je n'ai pas oublié* 216）。ともにピエ・ノワールであるが、一人はキリスト教徒、一人はユダヤ教徒である。現実世界では、二人の祈る場所はシナゴグとカトリック教会にはっきりと分かれる。二人の共同の目指すのは、「人間のチャペル」である（216）。この方向での代表作は、次のようなリフレインをもつ「あらゆる国の子供たち」（«*Enfants de tous pays*», 1963 作詞：ドマルニー、ブラン、作曲：マシアス）であろう。

あらゆる国の子供たち、傷ついた手を差し出して
愛を蒔き、生を与えよう
あらゆる国の、あらゆる色の子供たち
みんなは心の中に私たちの幸福をもっている

マシアスは『私のアルジェリア』の中で、自分の立場を総括して、「普遍主義」という言葉を使っている（58;69）。詳しく展開されているわけではないが、「人類の諸権利の擁護者」（70）などとも述べるところからも窺われるように、それはフランス革命時の人権宣言などに明確に謳われたような普遍主義であり、マシアスは、「私は常に、共同体的所属を超える普遍的な価値の擁護に努めてきた」（*Mon Algérie* 218）と断言している。すでに見てきたことから明らかなように、

マシアスは具体的な人間の形から遊離して抽象的な人間の次元に超越してしまうわけではない。ユダヤ人であることも、アルジェリア出身であることも、アラブ文化を養いとしていることも、またフランス文化に深く浸透されていることも、すべて否認しない。一人の具体的な人間の形を尊重して、「どんな人間存在も、その構成要素のたった一つに還元されることはない」(*Mon Algérie* 218)と主張する。むしろ、この自分を作る要素から普遍への道を切り開こうとしている。1997年、国連事務総長コフィ・アナンから国連の平和大使の一人に任命されたことも、「律法の石板を普遍化することを使命とするユダヤ教に忠実であり続けること」になるととらえている(*Mon Algérie* 225)。

しかし、共同体的なものと普遍的なものは常に融和しうるわけではないであろう。両者が摩擦を起こしうる場面でこそ、その普遍主義は試される。マシアスはどういう解法を見出すのであろうか。国連の平和大使に就任することを承諾するにあたり、マシアスは、コフィ・アナンに次のようにその「躊躇」を告白している。

私はイスラエルに感情的、歴史的にとっても結びついているので、例えば、国連がこの国に反対する方針をとるに至るとしたら、おそらく私は自分の主観性を優先させてしまう危険があります。(*Mon Algérie* 225)

確かに、ふつうの人間が根本的にどれほど不偏不党でありうるのか、その懐疑を自分に対してもぶつけて、マシアスが誠実であることは確かであろう。とりわけ、出身共同体への愛着と普遍的な理念の志向が衝突する場面で、上のように告白することは共感を呼びうるかもしれない。しかし、それに続けて、マシアスはすぐにこう言っている。

私は親イスラエル派である前に、国連憲章と人権宣言を強く支持しています。
(225)

すでに引用したように、「私は常に、共同体的所属を超える普遍的な価値の擁護に努めてきた」(*Mon Algérie* 218)とマシアスは述べていた。その普遍主義はいわゆるタテマエにすぎないと批判することができるのかどうか判断するのは難しいが、いずれにしても、マシアスの言動を通して言えるのは、マシアスが

自己と自己の所属共同体を批判できないことである。彼のユダヤ性は、ほとんど手付かずのままである。人間の普遍性や文化の複合性を尊重するのはいいとしても、もし、要素それぞれの問題性を認識し、その改変を試みないのであれば、それは絶対的な単一要素に立て籠もるとどれほどの違いがあるのだろうか。

注

- 1) 本稿は2005年12月3日、名古屋大学で開催された、日本比較文学会中部支部第20回中部大会シンポジウム「20世紀ポピュラー音楽の言葉——その文学的および社会的文脈の解明——」において行なった発表を改稿したものである。
- 2) こうした見解に説得力をもたせるためにはたくさんの論拠を提出する必要があるが、稿を改めて試みたい。
- 3) またマシアスの歌は、アルジェリアではずっと放送禁止になっている (*Mon Algérie* 15)。
- 4) この映画は、内戦状態に陥った1990年代のアルジェリアを描いている。エスノセントリズム的だという評 (*L'Humanité*) もあったが、マシアスに従うなら、ピエ・ノワールの大多数は、アルカディと見解を共にしている。「私たちはアルジェリアの現在の苦しみに対して同情と憐憫をもっているだけである。」そしてその元凶は、「原理主義者たち」なのである (*Mon Algérie* 13)。
- 5) マシアスはレリスが受けていた脅迫なども含めてその殺害事件を詳細に語っている (*Mon Algérie* 161-172)。レリスはフランスに移住するべくフランスに数週間滞在していたが、暗殺される直前にコンスタンチヌに戻っていた。なぜ戻ったのか、とマシアスは不満であったが、レリスは次のように答えたという。「私はフランスで生きるよりアルジェリアで死ぬほうがいい」 (*Mon Algérie* 164)。
- 6) 1961年7月29日、マシアスは祖父母とともに、また「他の何千もの絶望した人々とともに」アルジェリアを離れる船に乗った。「祖母がおずおずと甲板を歩いているのを見たが、なぜ変装などしているのかわからなかった。思い出す限り、私は祖母が昔から“土着の”服を身に着けているのをずっと見てきたし、私たちのところのすべてのユダヤ人老婆と同様、頭には角のようなものを結びつけ、その上からスカーフをしていた。それが、西欧に立ち向かうのを準備するかのように、祖母は伝統的な服装からフランス的な茶色のワンピースに着替えていたのだ！私は祖母だとわからなかった。全く似合っていない。本当に胸が裂ける思いだった」 (*Mon Algérie*

176-177)。フランスへ向かうその船上で出来上がったという「さらば、わが祖国」(«Adieu, mon pays», 1962)が、のちにピエ・ノワールの「聖歌」となる (*Mon Algérie* 194)。

ピエ・ノワールという言葉の由来については様々な説があるが、マシアスによれば、この言葉はアルジェリアでは全く知られていず、フランスに来て始めて耳にした時、「我々は彼らと同じフランス人なのに、インド人だと扱っている！」と、苛立ちを覚えたという (*Mon Algérie* 182)。

- 7) マシアスのこだわりは、必ずしもユダヤというところにはないし、ピエ・ノワールというところにさえない。アルキや、テロリズムの危険を逃れたアルジェリアの愛国者まで、誰でもあれアルジェリアを離れなければならなかったすべての人と、アルジェリアとの「和解」の機会にしようとしてマシアスは考えていた (*Mon Algérie* 51)。だからコンスタンチヌのユダヤ人ばかりではなく、アルキと一緒に行く必要性を強調したという。そうでなければ、「過去の苦しみを清算する機会を逸してしまう」と感じていたのである (51)。しかしブテフリカ大統領にとって、アルキは「コラボ」であり、許しがたい存在であり、それは叶わなかった。また、1998年武装イスラム集団 GIA によって暗殺されたカビリア人歌手マトゥブ・ルネスの墓参りをすることも諦めなければならなかった (52)。
- 8) 私が視聴したのは、このコンサートの DVD 版 (*Enrico Macias Live 2003, Trema, 2003*) である。
- 9) ただもともとの仕事はそうではなかった。前著『いや、私は忘れてはいない』では、子供のころを振り返って、マシアスはこう書いている。「私の父はいい音楽家だったが、プロではなく、週日、植民地の布地を売りさばく店のセールスマンとして働いていた」 (*Non, je n'ai pas oublié* 20)。祖父母も同業者である。マシアスも出演してヒットした『ウソを言えば、ほんとのこと 2』 (*La Vérité si je mens ! 2*) が登場させるパリのサンチエ地区のチュニジア出身のユダヤ人たちと同業でもある。しばしば言われる、〈ユダヤ人職業〉である。
- 10) バスタンジーの曾祖父はレーモン・レリスの師であった (*Mon Algérie* 28)。
- 11) これについては、拙論もご参照願いたい (田所)。
- 12) 例えば、シモン・シュヴァルツフックス (*Schwarzfuchs* 13-20)、リシャール・アユーン (*Ayoun* 146-148)、アンドレ・シュラキ (*Chouraqui* 74-76) などを参照されたい。
- 13) 例えば、2003年、フランスのユダヤ人社会向けの最大の雑誌『アルシュ』が一年かけて行った特集シリーズ「アルジェリア・ユダヤ人の記憶」の趣旨説明を行った文章の中で、メイル・ヴァントラテルは、アルジェリアのユダヤ人が集団としてもつ記憶を次のように述べている。「彼らの集団的記憶の中には、クレミュー令、

コンスタンチヌの虐殺、ヴィシー政府による差別があった。また、多くの人は、自分たちの祖先がフランス人の到来のはるか前から、さらにはアラブ人の到来の前から、この国に住んでいたという意識をもっていた」(Waintrater 42)。

- 14) この「ポグロム」がマシアスの家族の中で、非常に重大な事件として留まっていることをマシアスは『私のアルジェリア』でも強調している。そこでは、このポグロムがフランスの極右組織「火十字」によって教唆されたアラブ人によってなされたものであると指摘している (*Mon Algérie* 155)。
- 15) 総督政府に近い位置にいたトルコ系のハムダン・ホジャは、フランスによる侵略の最中 1833 年、『鏡—アルジェ総督国の歴史的・統計的概観』を刊行し、その中で、フランスに対して共同して抵抗できないトルコ権力とアラブ人の不和を描き出している (Hamdan Khodja 187-192)。

引用文献

- Abitbol, Michel. *Le passé d'une discorde. Juifs et Arabes depuis le VIIe siècle*, Perrin, 2003.
- Ayoun, Richard. «Les Juifs d'Algérie», *Les Temps Modernes*, n° 394bis, mai 1979.
- Camus, Albert. «Préface», Albert Memmi, *La statue de sel*, Gallimard, 1966.
- Chouraqui, André. «Le statut du dhimmi : le Juif au regard de l'Islam», *L'Arche*, n° 524-525, octobre-novembre 2001.
- Hamdan Khodja. *Le miroir. Aperçu historique et statistique sur la Régence d'Alger*, 1833, Actes Sud, 1985.
- Hennion, Cécile. «Les juifs sur le qui-vive», *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2168, 29 juillet -4 août 2002.
- Humanité (L')*, 12 avril 2000.
- 井筒俊彦『イスラーム文化』、岩波文庫、1991年。
- Macias, Enrico. *Non, je n'ai pas oublié*, en collaboration avec Jacques Demarny, Robert Laffont, 1982.
- . *Mon Algérie*, en collaboration avec Florence Assouline, Plon, 2001.
- . «Le rêve oriental d'Enrico», entretien, *L'Humanité*, 15 novembre 2003.
- Memmi, Albert. *Juifs et Arabes*, Gallimard, 1974.
- . *Le nomade immobile*, Arlea, 2003.
- Monde (Le)*, 27 novembre 1973.

Schwarzfuchs, Simon. *Les Juifs d'Algérie de la France (1830-1855)*, Institut Ben-Zvi, 1981.

田所光男「メンミにおけるアラブ＝ユダヤ共生言説批判（I）－「アラブ系ユダヤ人」の声－」名古屋大学国際言語文化研究科紀要『言語文化論集』第 XXVII 巻第 1 号、2005 年。

Waintrater, Meir. Introduction, *L'Arche*, n° 539-540, janvier-février 2003.

山本健治「雑感・戦後日本の世相と流行歌（22）」http://www.asahi.co.jp/call/diary/yamaken/essay_22.html